



## 待降節第 4 主日 (ルカ 1:39-45)

主がおっしゃったことは必ず実現する

「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」(1・45) 私たちに、神の働きかけを心の底から信じさせる投げかけです。私たちの中に、エリサベトと同じ信仰が育っているか、ご降誕を目の前にして、確認するひとときとしましょう。

今年、何回か釣りに行った中で、11月でしたか、3年目にして初めてイトヨリを釣りました。賄いさんにあげたので食べていませんが、「こういう場所で、こういう魚がいるのではないか」そんな推理を立てて、その通りに釣り上げた一匹でした。

釣りが好きな人は大抵せっかちな人なので、釣れないと場所を変えます。散々場所を変えてそれでも釣果がなければ、釣った経験のある場所に戻ります。いろんな試行錯誤を繰り返しながら、最終的には実績のある場所に望みをかけるわけです。

今年一年で数えるほどしか行ってないので、あれこれ言えた義理ではありませんが、自分が釣った場所の中で、今回のイトヨリを釣った場所は、「そうだろうよ。ここで釣れないはずがない。やっぱりいたか！」とブツブツ独り言を言いながら帰った忘れられない思い出です。

福音朗読に戻りますが、エリサベトの言葉は、マリアをたたえる言葉であると同時に、自らに対する言い聞かせでもあったのだと思います。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」エリサベトの夫ザカリアは、主の使いの言葉を全面的に信じることができませんでした。神の使いに「あなたの妻から男の子が生まれる」と告げられた時、信じることができなかつたのです。

エリサベトはどうだったのでしょうか。「私は信じたいと思います」と夫に答えたのでしょうか。むしろ、「冗談言わないでください。私がいくつだと思っているんですか？本気で言っているのですか？」そう答えたのではないのでしょうか。

けれども、神の計画は人が信じるかどうかで始まるわけではありません。最初は信じていない人の中でも神様は計画を始めることができます。マリアがエリサベトを訪ねた頃には、立派な妊婦になっていたでしょう。ようやくエリサベトは、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」このように賛美できる心境になったわけです。

人が思い描いたとおりではないかも知れませんが、神の描いた計画は必ず結果が返ってくる。その体験を積んだ人は、ますます同じ体験を深めようとします。どんな人も、結果が返ってくる場所に答えを探すからです。エリサベトにとってそれは、神の計画でした。人間のどのような業も、エリサベトを「これは必ず実現する」と納得させることはできなかつたのです。

マリアも同じ気持ちでした。神の救いを待ち望んでいたマリアは、

人間のどのような働きにも自分を委ねることはせず、ただひたすら、神のなさる業に信頼を置いたのです。たとえそれが人間の理解を超えることでも、神のなさり方よりも信頼できる方法をマリアは知らなかったのです。そしてマリアが持っていた神への信頼を分かち合える人、分かち合える女性は、現時点ではエリサベトの他にはいませんでした。だから急いでエリサベトに挨拶に行ったのです。

私は、趣味の釣りで迷ったら実績のある場所に戻ります。場所探しは、それはそれで楽しいですが、どうしても結果につながらないと、「あの場所だったら」という場所に行きます。たとえとしては比べものになりませんが、マリアとエリサベトが「主がおっしゃったことは必ず実現する」この体験に信頼を置いていたことを話すきっかけになればと思います。

最後に教皇様来日のニュースを取り上げて終わりたいと思います。すでに皆さんの中でも話題になっているかと思いますが、来年末に、教皇フランシスコは日本を訪問したいと願っております。

教皇様は、先に前田大司教様を枢機卿に親任しました。世界で120人しか選ばれない職責で、80歳以下の枢機卿はいざという時には教皇選挙に召集される身分です。日本に枢機卿が与えられたことを見ても、いかに教皇様が日本に心をかけてくださっているかが分かりますが、今回はさらに、ご自身が日本を訪れることを表明されたわけです。

「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。」(1・43) 教皇様が日本においでになる大切なわけを、私たちも来年末まで思い巡らしたいと思います。教皇聖ヨハネ・パウロ二世が来日した時にまかれた種が、今たくさんの実を結んでいるように、今回の訪問で、次の時代に必要なものを教皇様の言葉と行いから学ぶことにしましょう。

主の降誕（夜半）(ルカ 2:1-14)